

# 私本・古代史

(色染昭和 31 年卒 安田 功)

私が生まれたのは奈良盆地の東南、秀麗な三輪山の麓で、将に古代史の舞台の真直中、邪馬台国畿内説の学者が、卑弥呼の墓としている箸墓古墳を朝晩眺めながら育った。少年期は戦時中の事として皇国史観一色、不自然な歴史に疑念を挟む余地はなかった。古代史の本を読み漁る時間が出来たのは定年後で、科学に準拠した事象、発掘された事実、合理的で納得できる論説だけをサマリーにして保存してきた。20 年を閲し、これを点綴して「私本・古代史(日本の始まりから律令国家の成立まで)」に纏めた。450 頁に膨らみ、今回、本稿の限られた紙幅には纏め難いが、編集子の要請もあり、粗筋を紹介したい。

日本列島に人の足跡が見られ出すのは、4 万年前。3 万年前頃からその数が増え出し、北方から寒冷順応した人種、南方から海洋適応した人種が住むようになり、混じり合いながら、BC1 万数千年から BC4 百年までの縄文時代に、特に BC9 千年頃の急な温暖化の後、列島が孤立、閉鎖された社会で、狩猟、漁労とクリ、アワ等の植物性食料の栽培も含めて豊かな生活をし、ある程度均一化してきた。

この生活を一変させるのが、水耕栽培の稲の渡来である。BC10 世紀後半に中国江南から、或は朝鮮半島を経由して九州北部に入って来た水田稲作は、BC7~6 世紀には近畿、BC4 世紀初めには青森まで広がる。渡来人は人数的には少ないながら豊かな食糧自給で人口爆発を起こし、本州人の形質に影響を及ぼした。この変化から取り残された沖縄や北海道のアイヌとは差が出来、日本人の二重構造を形成することになる。東アジア人の DNA 分析では、大局的には当然類縁性が高いが、日本人は朝鮮、中国と可成り異なる要素も持っている。陸続きの中国、朝鮮では、孤立した列島とは異なり、当然異民族との混血が進んだことがその原因の一つである。その上、人間の形質・性格、行動を決める要因として、遺伝子の寄与度は存外低く 40%、環境要素が 60%位と見られている。孤立した環境で、日本人は独自の形質を形成したと見られる。中国、朝鮮半島との交流は古代から結構あったが、島国の日本は、陸続きの国と違い、激しい民族間の抗争も少ないので、扶余族の本質を温存し、勤勉でお人好し、大陸の胆汁質とは異なり、潔しさを美德とし、誠実、礼節を重んじる形質が形成されて行ったと見られる。外敵の侵略が少ない反面、自然災害が多く、その度毎に神を恐れ、八百万の神を信仰し、互いに助け合う優しさが形成されたと見られる。是が中国、朝鮮と形質に差を作った。渡来人も逐次この環境に馴化させられることになる。

それにしても、古代から中国、朝鮮半島との交流は、存外に密なものがあつたようで、中国、朝鮮での争乱の度毎に、押し出されるように、政治亡命や難民が波状的に渡来している。一度の人数は少ないものの間断なく渡来している。彼らは先進の技術、材料、統治のノウハウを持ち込み、政治勢力に大きい影響を及ぼした。特に鉄製の武器は、圧倒的な威力を示した。渡来ルートは、中国半島から北九州へ、もう一つのルートは半島東部から出雲地域へであった。当時の倭国は、各地に豪族勢力が多数蟠踞し、水耕稲作の発展の結果、所領域を巡る争いが起って来ていた。その中で有力なものは、出雲が中心となる、丹波、北陸、近江、東海まで及ぶ山陰勢力、北九州には諸勢力が鎬を削って蟠踞し、九州南部にも別の勢力があり、吉備、大和にも、一定の勢力が形成されていった。

九州の各地の神社等に伝わる伝承によると、2 世紀の中頃、出雲勢力の須佐之男が、九州にその影響力を広め、その子・饒速日命は大和へも進出している。北九州では、主として中国南部からの渡来人を中心に、邪馬台国が成立する。記紀の記載は不自然、不合理で、天照

と須佐之男は姉弟だったのではなく、須佐之男が卑弥呼を現地妻としたと見ている。同じ頃大和でも出雲、吉備勢の主導で、東海の勢力を糾合して、祭祀中心の纏向遺跡が営まれる。大和は、大和湖の干上がりが進み広大な農地が増えた。農業生産が何処よりも豊かになり、東西の交流の要衝を占めている事、三輪山信仰の求心力で繁栄を始める。その豊かさを求めて、九州勢力から、自然発生的に勢力が少しずつ大和に移動し、大和の勢力が革新され、増え続けた。

邪馬台国論争は不毛である。倭国は九州にあり地政学的に、また、外交能力面でも、中国の権威を背景にして権威を誇示することを狙って通交していて、それが魏志倭人伝の記録として、偶々残った。邪馬台国だけが日本の唯一の国で、代表という存在では決してなかった。畿内勢力の外交はずっと後の推古朝辺りからのことになる。また、邪馬台国が組織的に、畿内へ東征或は東遷したというものでもなかった。自然発生的に少しずつ大和に移って行ったものと見ている。半島からも有力者の渡来がこのルートに乗って大和入りする。

3世紀初めの神武東遷では、その勢力から見て、一気に大和を征服する実力はなく、数多い豪族の中の一豪族として、有力な三輪族と縁組して漸く地歩を確保していったのではなかろうか。九州の卑弥呼は 247,248 年と続く九州地方の皆既日食を予言できず、権威が失墜して葬られ、国が乱れた後、台与が立つ。

4世紀初めから中頃にかけて、伽耶に縁のある崇神が乗り込み、神武系皇族と血縁を作り、三輪の祭祀権を手にして、諸豪族の中で頭一つ抜け出して、大和王権の基礎を作り上げた。

折しも、長年に及ぶ気候変動期で、各地に飢饉、洪水、疫病の流行が広まり、大和の地理的優位性、農業生産力と祭祀を頼って勢力が集まってくる。中国では西晋が長続きせず、4世紀に入ると五胡十六国時代と統一のない時代に入る。その煽りを受け、長年半島を監視していた帯方、楽浪の二郡が高句麗に滅ぼされ、北からの圧力が強まる。4世紀末、倭は、百済と組んで新羅への干渉を強め、高句麗・新羅連合に対して二極対立構図を呈していた。これを反映して、日本から中国へは 266 年台与の朝貢を最後に 413 年の東晋への遣使迄 150 年の空白時代を迎え、中国の記録に残らなくなる。空白の四世紀と呼ばれる所以で、この間は好太王碑等の金石文字の記録、半島の三国史記だけが参考資料になる。この間、弁韓と九州倭国の交易の他、弁韓と出雲、近江の交易ルートが出来ていて、近江の息長氏らに大きい隆盛を齎していたが、帯方郡の消滅で経路が断たれることになる。この情勢の中、崇神勢系の仲哀と、近江勢の神功皇后が呉越同舟状況で、九州遠征に出かけたが、葛藤が表面化する。折しも高句麗から圧力を受けていた弁韓系の金管伽耶から、有力な勢力が逃げるように渡来して来て、近江勢はこれを受け入れる。仲哀は謀略で消し去られ、神功と深く交流していた伽耶の有力者、例えば武内宿禰に擬される有力者との間に出来た子供(応神)を擁立して、近江勢が崇神の大和勢に対抗する戦略に転じたと見られる。これが応神の東征で、当座幼い応神に代わって神功が実質的な皇位に就いていたと見られる。

応神は河内に宮を設け近江と共に大和を包囲する体勢となり、その後 6 世紀まで応神系王朝が続く。倭の五王の時代には中国の冊封を受け、東アジアでの覇権を目指す、末期・雄略の頃から、冊封体制からの離脱、治天下大王の確立を志向するようになる。特に国政の実務能力に長けた、渡来氏族は大きい力となった。しかし、天皇家の血筋を尊重する考えはかなり強かった模様である。大和王権は半島から入手した人と物を独占し、強大な倭王朝を築き、地方支配を強め、畿内に次々と壮大な前方後円墳が出現する。第 15 代応神から始まった王朝も第 25 代武烈で後継が亡くなり、そして応神の末裔とは言うものの縁の薄い継体

に、難洪の末に引継がれる。半島への出兵を巡り九州の磐井が乱を起こし抵抗したので制圧されるが、完全制圧するほどの圧倒的な勢力はなかったので、大部分の勢力は残された。

継体は強力な政治を行えず、後継問題も混乱する。6年程の不安定な時期を経て、二代後540年になって宣化の娘に欽明が入り婿することで、体勢が整えられる。欽明は伽耶に出向いていた皇族か、或は伽耶の重鎮の子弟と見られる。欽明の後押しをしたのが、伽耶出身で、代々大和の政治に深くコミットして成長して来た蘇我氏で、特に稲目が権勢を奮って欽明を押し上げた。当時の百済、伽耶、倭は扶余系民族として、緊密な関係で結ばれ、思いの他往来は多く、日常化していた。欽明の代では、屯倉、国造制が進み、官僚組織も整備されてくる。欽明は出自の任那救援に力を注ぐが、任那は562年には新羅に滅ぼされる。欽明擁立の主役を担った蘇我氏は、子女を皇室に入内させ、欽明以後も敏達、用明朝を牛耳る。欽明朝に仏教の導入を廻って、物部と蘇我が対立し、古代から最大の権力を維持してきた物部はその主力が滅ぼされる。そして蘇我が権力を増し、飛鳥で仏教文化の華を開かせることになる。

6世紀末には隋が中国を統一し、東南アジア情勢も慌しくなる。崇峻の後、馬子は数多い後継者を全て蹴落とし、敏達の妃だった孫の推古を立て、支配力を強める。推古の政治統治の補佐に、伽耶辺りから九州に渡来して来ていたテクノクラート、当時20歳位の厩戸王子を、多分九州から連れて来て、太子として処遇して当たらせた。太子は馬飼い集団に生まれ、学問、外交の素養を教育された青年で、中国、半島の事情にも明るかったので用明に重用された。厩戸は聖徳太子で、十七条の憲法制定とか、経典の注釈、遣隋使の派遣等大和王権としては九州の倭国と同様の外交にも力を尽くす。後世に、聖徳の尊称を付けられ、太子信仰が盛り上がることになる。

7世紀初頭には小野妹子らを隋に遣わし、有名な「日出処の天子」の書を送り、それに応じて裴世清が筑紫に来て、序でに大和も訪問して、倭国以外に近畿に大国があることに驚いている様子が記されている。隋はこの時点で、九州の倭国の他に畿内に日本国という大きい勢力がある事を初めて認識し、記録を残している。このことから邪馬台国畿内説は極めて不利である。

馬子、推古亡き後は、皇位は近江系の舒明、皇極に移るが、安定しなかった。この頃、伽耶は百済に反抗して新羅に取り込まれていたが、それに反抗する伽耶の重臣が沢山渡来して近江に入っていたと見られる。半島情勢は高句麗・百済勢と唐・新羅勢の対立する体制になっていて、大和は親唐・新羅に傾きかけていた。国内でも非蘇我派はこれに反対しており、この対立を深めた。百済は大和が唐・新羅体勢に入るのを牽制して、643年二人の皇子を日本に人質として送り込んで親交を深める政策に出た。長男の豊璋(後の鎌足)と禪広である。蝦夷・入鹿の専横に対して、段々反対勢力が増えて来ている中で、反新羅の山背大兄を盛り立てる動きが出、蘇我はそれを放置できず上宮王家を殲滅して、入鹿は更に人気を落とす。この機会を捉え、百済から派遣されていた余豊璋(鎌足)が、反蘇我の動きを強め、中大兄(舒明と宝皇女の子)を取込み、反百済の蘇我打倒の計画を練る。その結果が、645年、飛鳥板蓋宮大極殿での入鹿斬殺の乙巳の変である。

乙巳の変の後、中大兄は自ら皇太子、鎌足は内大臣となり、叔父の孝徳を立て、「改新の詔」を出し政治改革を始めるが、蘇我時代からの挙国体制、中央集権の方向は続けられた。対外交渉の便から難波に宮を移すが、外交路線の対立が表面化し、鎌足の百済偏重派が孝徳を難波に置き去り、大和に遷る。この時点では誰が考えても、唐側に加担することの方が、国の在り方として正解であったであろう。事実主流はそう考えていたが、鎌足の中大兄への働

きで、偏向路線を歩むことになる。記録ではこの時点で、大海人皇子が初めて日本書記に登場してくる。大海人皇子は、記紀では中大兄(天智)の弟として記録されているが、他の記録など参照すると、4歳も歳上で、天智の娘を4人も娶っていて納得できない。大海人は、その取り巻きが海人族で九州に繋がる事項が多い。九州の王族の子弟、或は九州から尾張に移動してきた人物でなかろうか。天智としては、九州海人族を引き込み、半島との交渉で渡海の利便を確保したかったと見るのが分かり易い。又、バランス上、親新羅の勢力を政治中枢に送り込んだ一種の妥協との説も捨てがたい。因みに、天皇家の菩提寺とされる泉涌寺では天武(大海人)系は皇族として扱われていない事でもこの辺のことが窺える。やがて大和王権が九州の倭国を併合し、漸く日本を代表する勢力が、固まることになる。天智称制の頃で、大海人の起用が条件であったかもしれない。しかし、東南アジアの情勢を見誤って、百済との偏執的好みが災いして、白村江の大敗に繋がる。そして敗残の派遣軍は、百済の官人・遺民らと帰国することになる。

唐・新羅軍はその後、全力で高句麗攻略を急ぎ、倭国に対しては本格的追討の余裕がなく、百済派遣軍の郭務悰を派遣して帰順を促すが、称制・天智は唐の正式勅使に非ずとし、直接交渉を避けた。敗戦の危機感と諸豪族からの非難を避けるため、中国、朝鮮の状況をよく見ながら、664年「甲子の詔」を出し、国内的に挙国体制の整備を進めると共に、翌年になって対馬から筑紫にかけて守りを固めた。唐も高句麗を攻めあぐねていて、倭への本格的攻勢の余裕はないものと半島情勢を的確に見極めてのことと見る。その翌年、唐の正式の使節・劉徳高の渡来に対しては遣唐使を派遣して協力を示したと見られる。しかし、高句麗も668年に征討されてしまう。唐・新羅両軍の倭国への侵入の危険性が高まり、この機に博多湾岸にあった大宰府を内陸に移し、防塁と水城を築き、更にその後も長期に亘り筑紫、長門、讃岐、備中、大和等に30もの朝鮮式山城を築城している。又、668年に大津に遷都した。防衛の目的だけでなく、百済遺民が多く、高句麗との交流に恵まれていた為である。唯、大変幸運なことに、その直後、唐は吐蕃の侵入を受け、高句麗の反抗、更には同盟していた新羅の反旗もあって、唐の目論見は失敗し、倭国へは征討よりも同盟を求めている。669～702年までは遣唐使を送らず、専ら新羅との交流で文明を吸収し、一方新羅は倭に朝貢して唐からの圧迫に対抗しようとしていた。

この間、「甲子の詔」に続いて「近江令」を出し、庚午年籍の整備など、海外からの脅威に慄くだけでなく国内整備も着実に行っている。律令制度への着実な歩みを始めたのである。その中で669年には鎌足が、671年には天智が崩御する。大海人は皇太子であったのに、天智の晩年から嫡子・大友皇子に重点が移り、大海人の吉野への逃亡、壬申の乱へと移る。この乱の背景には、天智—鎌足の異常すぎる百済への偏りと、百済遺民の大量の受け入れに対する反発、その挙句の白村江の大敗に対する反発、更に唐が新羅牽制の為百済に傀儡政権を復活させようとする動きをしたため、親百済派が親唐派に一変する中、新羅が日本に親唐派が優勢になることを極度に警戒して工作した事、日本内に唐への服属を逃れて自立しようとする動きが起こるなどが複雑に絡んでいいた。大海人に元来備わった霊威・権威に加え、その的確で迅速な戦略、東海豪族や西国の大宰の味方があって、この古代最大の内乱は1ヶ月で大海人が勝利する。

壬申の乱に勝利した大海人は飛鳥浄御原宮を造営し、673年に天武として即位する。皇后

には天智の娘・鸕野讃良皇女を立てる。天武の治世 14 年間は大臣を用いず、官人を登用し天皇自ら政治を掌握し、徹底して皇族中心の皇親政治を行った。近江令の官制を基本的に継承し、官人の登用、公戸への課税や出挙など、それを規定する諸法令を整備する。これは、単なる法整備だけでなく旧豪族達の土地や民の利権を放棄させる社会大改革であり、天武のような強力な指導者でなければやりきれない大鉦であった。更に 681 年に律令制定の詔を發布し、飛鳥浄御原令を作る。唯、その完成は天武の死後、689 年「令 22 卷」を施行し、更にその路線は 701 年になって大宝律令として完成するまで懸った。天武の皇親政治で一気に革新が進み、予ての構想の律令制度が発足することになるが、借り物の制度でその後も改正、補充が進められてゆく。対外的に「日本国」を名乗り、「天皇」号を称するのも天武朝であった。高祖に倣って絳旗を用い、日本最初の銅銭「富本銭」を鑄造した。そればかりでなく飛鳥池遺跡発掘物を見ると、諸金属素材の装飾品や仏具、工具や建築用金具或は武具、玉類の工房跡が出ていて、革新的開明的な政治を行った事が解る。天照大神に繋がる神統思想と共に仏教も重視した。古事記の編纂も命じている。天武はまた藤原京の建造も構想していて、薬師寺の建造はその設計図に基づいて造られている。

天武は志半ばで、686 年崩御する。後は、高市皇子や状貌魁梧・器宇峻遠と褒め称えられる大津皇子の登用を考えていたようだが、皇后が強引に即位して持統となってからは、自分の子供への継承へ大きく舵を切る。だが、期待した草壁皇子が夭逝するとその子・軽皇子(文武)への継承を専らに、鎌足の子・不比等の入れ知恵を用いながら、形振り構わず有力皇族を排除してゆく。それでも、天武の遺志であった藤原京の建設と律令整備で、飛鳥浄御原令の施行、大宝律令の制定は忠実に推進する。更に、平城京の建設や養老律令の編纂で 8 世紀初めに律令国家の骨格が整った。これは律令国家の完成というより、日本型律令制構築への新しい出発点と位置付けられる。

不比等は天武朝では逼塞していたがその復権を狙っていて、持統とベクトルが合っていた。不比等には天智の落胤の噂もあり、とすると持統とは兄妹になる。不比等の野望の第一歩として、律令を支配することで、権力の基盤を固めて行く事になる。不比等は持統を巧みに利用しながら、行政のトップまで上り詰める。持統も不比等を利用して、自分の血筋を専一に不比等と独断専行を極めることになる。その為の権威づけに、伊勢の神を男の太陽神から女性の太陽神に替え、自らを高天原の天照になぞらえ、権威づけをした。持統は天武の皇后の立場から、天智の娘に蘇り、不比等と共に天智—鎌足朝を復活させた。694 年藤原宮への遷都、701 年の大宝律令の完成で、天武の遺志は完成される。不比等の野心は自分の娘だけを皇室に入内させ、長期計画で藤原氏が確実に皇室の外戚になる謀略であった。不比等は藤原京建設、平城京の建設、大宝律令制定、養老律令制定、日本書紀編纂に関与し歴史に冠たるモニュメントを推進したスケールの大きい、業績の秀でた人物であったが、時期的に蘇我が律令の制定に情熱を燃やし、天武が強力に推進し、最後の華だけを持っていったという評価もある。そして遂に、娘・宮子を入内させていた文武との間の皇子・首皇子に、同年生まれの不比等の娘・光明子を入内させ、その野望の第一段階を達成する。

この頃の日本の指導者たちは、東アジアの中で大唐は別格として、東夷の中の中華であることを強く意識していた。702 年持統が崩御し、文武も 707 年崩じ、傀儡の元明朝になり、平城遷都される。不比等はトロイカ方式の政府審議官の中でも一人実権を欲しい儘にし、律

令支配で豪族達の力を削いでいった。日本書紀編纂も主導していたが、完成終末の 720 年遂に亡くなる。しかし、審議官には慣例に反し、不比等の息子を二人も入れている。高市皇子の息子・長屋王もここで登場して来、不比等の死後右大臣に昇格し、頭角を現す。不比等の第二の野望であった、文武と宮子の子の首皇子(聖武)に、不比等の娘・光明子を嫁がせ皇位継承への道を着々と進めている中で、資格において決して劣らない長屋王の存在は大きい障害であった。その後も無理を重ね、723 年、遂に史上初めて、皇族を母に持たない首皇子を聖武として即位させる。藤原系の皇子の宿願の即位であった。不比等らの努力もあり永年築いてきた律令国家が一つの到着点に達した時期であり、その蓄積に基づき、奈良時代を通じて最長の天皇として、自由に動くことが出た最初で最後の天皇となった。

長屋王と聖武、藤原氏との関係はそれでも当初良好であったが、天皇の母の呼称を巡り藤原氏と対立してから、不比等の四人の息子達に憎まれ、又、聖武と光明子の子が夭折して、長屋王の皇位継承順位が上がった事もあり、急に敬遠され陰悪となる。そして 729 年、四兄弟に屋敷を取り囲まれ自殺に追い遣られた。世に言う長屋王の変である。そして、「青によし奈良の都は咲く花の匂うが如く今盛りなり」と謡われるまでに藤原四兄弟の「我が世の春」が実現する。光明子は、史上初めて臣下から正式に聖武の皇后となった。しかし、藤原の栄華は長続きしなかった。735 年、西海道諸国で疫病が流行し、737 年には四兄弟が次々と天然痘に罹り、亡くなった。世間は専ら長屋王の崇りと騒ぎ、聖武もそれを信じ、怖れた。又、この時代日照りが続き、飢饉が何年も続いた。天変地異と疫病蔓延、盗賊の跋扈はすべて為政者・聖武の責任と感じ始め、当初藤原の子としてスタートしたが、徐々に反藤原の政治に転じ、「天武の末裔」を意識するようになる。745 年からは大仏建立に全てをかける。又、皇后はこの崇りは聖徳太子の崇りとし、法隆寺伽藍造営や、財物の寄進を盛んにするようになる。天皇、皇后挙げて仏教に帰依し、藤原の行為への懺悔、仏教信仰を通じての救済を願い、仏像、寺院の建造を行う。施薬院・悲田院を設けて、「積善の藤家」を標榜するようになる。そして、大仏建立、国分寺造営等鎮護国家の体製造りに邁進する。又、伊勢神宮への奉幣、忌まわしい平城宮から恭仁京への逃避の行動をとる。光明子も私財を投じて、東大寺の塔を建立し、法華寺が滅罪の寺として完成する。しかし、その後は再度権勢を持ち直した藤原氏に聖武は疎外され、749 年からは出家し、隠居同然の立場となり、傷心の内に、752 年未完成のまま、念願の大仏開眼供養に漕ぎつけたが 756 年崩御する。光明子は聖武追善の為、遺愛の品を東大寺に納め、涙の追討の心境を吐露している。一切経の書写を繰り返し、760 年亡くなった。もう一人、不比等の直系の曾孫・中将姫は、藤原氏の全ての罪を懺悔し、贖罪するように当麻寺に籠り、蓮糸で大曼荼羅を織り上げ教主弥陀仏に迎えられ、775 年入滅している。

以上長くなったが、本書の概要を纏めた。他に、時代考察のため、石器時代、縄文時代、弥生時代の遺跡、主だった古墳について概観した。又、日本語の起源、文字の歴史についても触れた。